

成城大学『経済研究』第二五一号抜刷（二〇一五年十二月）

書  
評

新城道彦著

『朝鮮半島の歴史——政争と外患の六百年——』

大  
森  
弘  
喜

書  
評

新城道彦著

## 『朝鮮半島の歴史——政争と外患の六百年——』

大森弘喜

韓ドラを興味深く観ていて気づき驚くことが幾つかある。一つは、朝廷における権力闘争の激しさや、王位継承をめぐる骨肉の争いが尋常ではないことである。もう一つは、朝鮮の geopoliticallyな宿命というか、周辺国との関係、とりわけ中国との関係に翻弄され続けていることである。『朝鮮半島の歴史』は、新城道彦氏が、李成桂(イソンゲ)が開いた李氏朝鮮の誕生から崩壊まで、さらに冷戦時代における二つの分断国家の成立まで、六〇〇年の歴史を描いた力作である。氏の朝鮮史叙述の観点が、「政争と外患」であると知つて、私の右に述べた印象があながち的外れではないことに安堵した。

本書の構成は次の通りである。

## 『朝鮮半島の歴史—政争と外患の六百年—』

### 第一章 朝鮮王朝の建国

1. 王氏から李氏への易姓革命
2. 支配基盤の整備
3. 握らぐ王権
4. 戦烈な派閥争い

### 第二章 華夷秩序の崩壊と朝鮮の危機

1. 日本の侵略
2. 迫りくる女真族の脅威
3. 清の侵略と朝鮮の属国化

### 第三章 終わりなき政争と沈みゆく王朝

1. 蕩平策の功罪
2. 勢道政治と相次ぐ民乱
3. 太院君と閔氏の争い
4. 朝鮮を開いた日本の挑発と清の勧告

### 第四章 清・日本・ロシアの狭間で

1. 親日と親露の角逐
2. 大韓帝国の成立
3. 日本による韓国併合
4. 抗日独立運動の諸相

### 第五章 朝鮮半島の分断

1. 戰後の主導権争い
2. 遠のく独立
3. 国家樹立の理想と現実
4. 朝鮮戦争の帰結

さて本書のような通史を紹介するのは案外難しい。内容を逐一説明するのは冗長であり、紙幅にも限りがあるのでできないし、叙述の当否も朝鮮史の門外漢の私にはコメントできない。そこで、「政争と外患」という視点から、幾つかのエポックとなる事件を私なりに整理して紹介したうえで、感想を述べたい。

### 1 第一次王子の乱・第二次王子の乱

太祖李成桂イソンゲには、正室の節妃韓氏ハングシとの間に六人の王子、継妃康子カンシとの間に二人の王子がいた。李成桂の後継

者、つまり世子の冊定をめぐつて、これらの王子たちの間に、そこに開国功臣たちの思惑も絡んで凄惨な争いが生じた。主役は節妃韓氏の五男の李芳遠だった。かれは父親の政権樹立に際しては特段の働きをしたのに評価されず、逆にその乱暴な性格も災いしてか、李成桂から疎んぜられ、宰相鄭道伝からも嫌われていた。

太祖が明の洪武帝に冊封を乞うために送った書簡の中に、不遜な文字があるとして難癖をつけられると、宰相鄭道伝は逆に遼東半島への攻撃を主張し、そのために王侯貴族が保有する私兵を国軍に吸収する必要を説いた。この主張は、私兵をもつ開国功臣や王族の反撥を惹き起こした。李芳遠はこれを好機と捉え、鄭道伝が節妃韓氏の王子らの殺害計画を企てているとして、先手を打つて鄭道伝を殺害し、さらに繼妃康子の王子二人をも殺害した。これが一三九八年の第一次王子の乱である。改めて世子冊定が議論となつたが、なぜか李芳遠は固辞し、次男の李芳香が世子に冊立され、第二代国王定宗となつた。しかし軍事権などの実権は李芳遠が保持していた。

国王定宗には嫡出の王子がいなかつたので、再び世子冊定が問題となつたが、今度は論功行賞に不満をもつ開国功臣の朴苞が、韓氏の四男李芳幹を唆して、李芳遠の殺害を企てた。白昼開城の街中で起こつた兄弟喧嘩は、李芳遠の勝利で終わり、李芳幹は配流となり、朴苞は誅殺された。これが一四〇〇年の第二次王子の乱である。かくて、国王定宗は、李芳遠を世子に冊立し、さらに身の危険を感じて国王の座を弟に譲つた。

第三代国王に就いた李芳遠すなわち「太宗」<sup>(1)</sup>は、開国功臣のもつ私兵を禁じて軍事権を掌握し、国王への權

(1) 「太宗」というのは通常一代目の国王に与えられる「廟号」（国王の死後に位牌を宗廟に祀る際に贈る称号）だが、

二代国王の定宗ではなく、三代目の李芳遠に与えられた。そこには、太祖の実質的な世子は自分であるとの自負や

力集中をはかった。行政制度も改め、六曹直啓制（ユクチヨチクケジエ）（工曹・刑曹・兵曹・礼曹・戸曹・吏曹）を整え、宰相たちの業務と権限を徐々にここに移していくた。

ところで中国との関係では、太宗は明との関係正常化を急ぎ、一四〇一年に建文帝から「朝鮮国王」として冊封されたが、明の内乱で帝位が変ると、一四〇三年に永楽帝から改めて詰命<sup>(2)</sup>と印<sup>(2)</sup>を賜つて冊封されることが慣例化した。朝鮮は定期的に朝貢する義務を負い、明からも回賜があつたが、この他に明は「歲貢」と称して、馬や金銀、後宮に入る未婚女性や宦官の進献を求めたので、その調達に朝鮮は苦しめられた。

太宗には、正妃閔氏との間に四人の王子がいたが、長子の讓寧大君は自由奔放な行動ゆえに、一旦世子に冊定されたものの廢位となり、代わりに聰明な三男の忠寧大君<sup>(2)</sup>が世子となり、やがて第四代国王となつた。これが世宗<sup>(2)</sup>で、朝鮮史上「聖君」と云われる。確かにかれは集賢殿を設けて優秀な若手官僚を育成・登用したり、自然科学の研究を振興し、水時計や日時計、雨量計などの器械の開発を促し、「訓民正音」＝ハングルを発明するなどの功績を収めた。

しかし、著者によれば「聖君」のイメージは、後世に創られたものだという。例えば「ハングル」とは「偉大な文字」という意味だが、当時はほとんど使用されず、二〇世紀以降に民族意識が高揚してから普及したという。

拘りが、李芳遠にはあつたのではないかと著者は云う。付言すれば、「定宗」<sup>(2)</sup>という廟号も、かれの死後二六年後にようやく付与されたものだという。

また、良人の男と婢との間に生まれた子は「奴婢」とする「從母為賤法」を制定して、奴婢人口の増大を図った。これは奴婢の所有者たる両班の利益にも沿うものだつた。<sup>(3)</sup>

ところで世宗は「外患」では見るべき成果を挙げた。対馬において倭寇を討伐し、半島北部の女真族を襲撃して豆満江流域を開拓し、六鎮（要塞）を置き、南部の住民を強制的に移住させた。

## 2 突厥靖難（キユウセイナン）

王位継承をめぐる骨肉の争い第二幕とも云うべきものが、一四五三年に起きた「突厥靖難」である。世宗は六人の夫人との間に、実に二二人の子をもうけたが、世子となつたのは正妃沈氏の長子李珦だつた。李珦は、病みがちの世宗に代わり決裁の権限を任せられたが、かれ自身も病弱だったので、世宗は李珦の一人息子李弘暉を世孫に冊立し、腹心の忠臣たちに将来を託した。

世宗が亡くなると、李珦が第五代国王文宗となる。しかしかれも原因不明の病で一年後に逝去し、世孫の李弘暉がその後継国王となつた。これが第六代国王端宗である。しかし一二歳の国王端宗には統治の経験もなく、父文宗の遺志で後を託されこれを補佐した二人の領議政、皇甫仁（ハイボン）と金宗瑞（キンジョン）が、次第に実権を掌握した。

(2) 正確には「詰命冊印」というが、これは中国の皇帝が周辺諸国に送つた、王位を承認する文書と金印である。

(3) 奴婢には両班など士族の所有する「私賤」と、公的機関が保有する「公賤」があつた。この法により奴婢は一世紀には全人口の四〇%を占める程に肥大化した。

王権の弱体化と臣権の強大化に不満を募らせたのが、世宗の次男首陽大君である。かれは幼い国王を補弼するとの名目で端宗に接近した。すると、皇甫仁と金宗瑞は世宗の三男の安平大君を担ぎ上げて、首陽大君を牽制した。かくて朝廷は安平大君派と首陽大君派に分かれて対立を激化していく。

初めのうちは安平大君派が優勢であったが、首陽大君は、強大な権力を振るう金宗瑞に反感をもつ高官らを仲間に入れて巻き返し、さらに武力により安平大君派を排除する手に出た。まず金宗瑞を自宅に襲い惨殺し、次に皇甫仁らを宮中に呼び寄せて一拳に殺害したのである。この事件は明らかに反逆であり、王位篡奪だったが、朝鮮史は「国難を靖んじた」という意味で「癸酉靖難」と呼称している。

安平大君は江華島に配流となり、のち賜薬（毒薬）を与えられて殺害された。首陽大君は領議政となり、兵曹と吏曹の長官を兼任して人事権を掌握し、中外兵馬都統使となり軍事権も掌中に収めた。そして金宗瑞一派を朝廷から一掃した。

これに対し、端宗は為す術をしらず、二年後の一四五五年に王位を首陽大君に譲り渡したが、それで身の安全が保障された訳ではなかった。というのは、首陽大君が第七代国王世祖となつた後に、クーデタ未遂事件が二度起つたからである。

最初の事件は、端宗の将来を託されていた成三問ら集賢殿出身の高官らが、端宗の復位を策して世祖暗殺を企てたものである。この頃、明皇帝の使者を昌徳宮で接待する催しが予定され、しかも宴会場で国王の護衛役を成三問の父親が務めることになった。成三問らはこれを千載一遇の機会ととらえ、宴会場に押し入り世祖を暗殺する計画をたてた。しかし直前になつて暗殺計画が漏れて接待場所が変更になつてしまつた。成三問ら首謀

者六名は逮捕され、拷問の末に「凌遲処斬」<sup>(4)</sup>の極刑に処され、加えて、この計画に連座した七〇名も処罰された。端宗は上王から魯山君に降格され、江原道に追放された。

その直後、今度は、世宗<sup>(セジョン)</sup>の六男で世祖<sup>(セジヨン)</sup>の実弟錦城大君<sup>(クムソンテグン)</sup>が、端宗復位を掲げて慶尚北道で蹶起し、都に進撃しようとした。かれは首陽大君が王位に就いた折、この地に配流となっていたのである。しかしこのクーデタ計画も世祖<sup>(セジヨン)</sup>の察知するところとなり、世祖<sup>(セジヨン)</sup>は最も信頼する韓明澮<sup>(ハンミョンベ)</sup>を遣わして、この計画を頓挫させた。錦城大君は反逆罪で処刑され、端宗も謀反の種火と目されて平民に降格された後、賜薬を与えられて殺害された。

世祖<sup>(セジヨン)</sup>は宰相らの権限を制限し、国王中心の中央集権的支配体制を構築した。端宗の後ろ楯となつた集賢殿を閉鎖し、経筵も廃止した。「経筵」というのは、御前で儒学を講義するだけでなく、政治問題をも論議する席であつた。行政機構では、王命を扱う承政院<sup>(スジョンイワン)</sup>を創設して権限を強化し、国政を議論し王権を規制する司憲府<sup>(サホンブ)</sup>の機能を弱めた。また『經國大典』を編纂して、国王を頂点とする支配体制の基本を定めた。さらに軍政改革では地方の司令官に当たる兵馬節度使には、地方の豪族ではなく、中央の文臣を派遣することに改めた。これは地方豪族の反撥を招き、一四六七年には北の咸鏡道<sup>(ハムギョンド)</sup>で「李施愛の乱」が起きた。他方、明や日本とは宥和的な政策で辺境の安定を保持した。

(4) 「凌遲処斬」とは最大限の苦痛を与えて死に至らしめるために、頭部や四肢などを切断して晒すという残忍極まる刑だった。

### 3 肅清の嵐と「中宗反正」

一四六八年に世祖が逝去すると、かれの次男海陽大君が王位を継承したが、一年余で夭折した。そこで世祖の亡き長子懿敬世子の二人の王子が王位候補となつた。慣例に従えば、長男の月山君が選ばれるのが自然だつたが、次男の者山君が選定され、第九代国王成宗となつた。成宗は即位時に一三歳と幼かつたので、世祖の王妃貞熹王后が「垂簾聽政」をおこない、世祖の二人の重臣、韓明澮と申叔舟が国政を取り仕切つた。やがて親政を始めた成宗は「士林派」と呼ばれる新進の儒学官僚らを登用し、王道政治を治めたので、比較的平和な時代が続いた。

成宗が一四九四年に三八歳で亡くなると、繼妃尹氏との間に生まれた燕山君が、僅か八歳で第十代の国王についた。この頃、士林派と世祖時代の「勳功派」の勢力争いが熾烈になつていたが、この派閥争いに燕山君の奇行が絡んで宮廷に血の雨が降つた。

『成宗實錄』編纂に当たつた勳功派の李克墩は、士林派の領袖金宗直が執筆した文章の中に、世祖を貶めるものがあると燕山君に告発した。常々士林派により不品行を咎められていた燕山君は、これを好機ととらえ、士林派の弾圧を始めた。金宗直の墓を暴いたうえで死体の首を切らせた。さらにかれの門下たちを処刑し、慘殺し四肢を切断するなどの非道をおこなつた。これが一四九八年の「戊午土禍（ボゴシカ）」である。

さらに凄惨な事件が起つた。ある者が、生母尹氏賜死の真相を燕山君に告げたのである。尹氏は成宗の寵愛を取り戻すために、砒素を用いて側室たちの毒殺を企てたという理由で降格され、さらに国王の顔をひつかくなどしたため、廢妃となり後に賜死させられたのである。事の真相を知つた燕山君は、成宗の二人の側室が

讒言を弄したとして柱に縛り付けて撲殺した。さらに母の廢妃に閥与したものを捕縛して死刑に処し、故人でその墓を暴いてその死体から首を切り落とさせた。これが一五〇四年の「甲子士禍（カブチヤサヲアソシカ）」である。  
以後燕山君の無軌道と奢侈、淫樂はいつそう激しくなった。世祖<sup>セジヨ</sup>が整備した円覺寺を潰してその跡地に掌樂院<sup>チヤウラグオン</sup>を建て、妓生を呼び寄せて遊興の場としたり、全国で美女狩りをして一万人の未婚女性を宮中に強制連行したとも云われる。臣下の諫言を煩わしいとして、司諫院<sup>サガヌオノ</sup>や經筵も廃止した。燕山君が朝鮮史上、「稀代の暴君」と云われる所以である。<sup>(6)</sup>

当然ながら各地で「反正」つまり「間違ったものを正しい状態に反す」動きが生まれ、終に一五〇六年クーデタが起きた。燕山君は廢位され、配流となりその地で病没した。後繼王には、燕山君の異母弟、晋城大君<sup>チヨンソンダクン</sup>がつき、第十一代国王中宗<sup>チヨンジョン</sup>となつた。このクーデタは「中宗反正」<sup>チヨンジョンバンショウ</sup>と呼ばれる。

中宗治世<sup>チヨンジョンジセイ</sup>においても、「己卯士禍（キボウシカアソシカ）」など士林派と勲功派との鬭争<sup>チヨウジョウ</sup>は続いたし、また外戚の坡平尹氏<sup>ハビヨンユンシ</sup>一族の間でも権力闘争が起つた。〔乙巳士禍（イヒアソシカ）〕

- 
- (5) 「垂簾聽政」というのは、朝鮮では女性が政治に口出しすべきではない、との儒教理念があつたために、王大妃や大王大妃が朝議に参加するときには、眼前に簾を垂らして恰も存在しないような措置を探つたことを指す。
- (6) このため燕山君は、後述の光海君とともに、廟号が与えられていない。

#### 4 壬辰倭乱と仁祖の屈辱

戦国の日本を統一した豊臣秀吉は、対馬の宗氏を介して朝鮮の第十四代国王宣祖(ソンジヨ)に参洛を求めた。この法外の要求に対し、一五九〇年宣祖は二人の使節を派遣した。秀吉はこれを服属と見なし、さらに明への侵攻の際には先導することを要求した。(「征明嚮導」) 朝鮮に帰国した正使は、秀吉の出兵が必ず起ると朝廷に警告したが、副使はその兆候はないと異を唱え正使を批判した。この二人の使節が別々の党派(東人と西人)(7)に属していたことも、情勢の正しい認識を妨げる原因だった。結局、朝廷は楽観論に傾き何の戦争準備もしなかつた。党派闘争が悲劇を生んだと云えるかも知れない。

一五九二年四月、秀吉は小西行長、加藤清正、黒田長政らの軍を順次派兵した。日本軍はまず釜山城を陥落せしめ、さらに北上して漢城に攻め入った。この報をうけた宣祖は漢城を脱出し平壤に逃れた。しかし小西行長の軍勢が近づくと、平壤を棄てて義州に逃れた。加藤清正の軍は別途北上し、威鏡道を会寧まで侵攻し、宣祖の長男臨海君(イムダク)を人質として捕らえた。この地は元々流刑地でもあり、中央政府に反感をもつ勢力はこの機に乗じて叛乱を起こした。

当初壊滅状態だった朝鮮軍だったが、そのうち朝廷の党派闘争で敗れ野に下った両班が、各地で「義兵」を組織して日本軍に立ち向かった。さらに、海戦に長けた将軍李舜臣(イッサンシン)が巨濟島附近の海戦で、藤堂高虎の日本水軍を撃破するなどの戦功をあげた。

明は自國に攻め入られる前に日本軍を辺境で食い止める必要を覚え、遼東軍に鴨緑江を越えて朝鮮領に入り、平壤を攻めるように命じた。だが逆に、祖承訓の軍は小西行長軍の銃撃を受けて敗退した。そこで今度は中央

兵力を投入することになり、李如松提督が四万の兵を率いて、朝鮮軍八千、義兵二千とともに平壌城を総攻撃、小西行長らの日本軍を討つた。勢いにのつて漢城まで進撃したが、地形を巧みに利用した日本軍に迎撃され敗退し、開城まで撤退した。

他方、朝鮮軍と義兵は、漢城の北方、幸州山で日本軍を撃破した。漢城に留まつた日本軍は、多数の死傷者と、兵糧不足、疫病蔓延で地獄絵の様相を來し、急速に厭戦気分が起つた。それは李如松の明軍も同様で、ここに和議交渉が実現するのだが、当事国の朝鮮は蚊帳の外に置かれた。和議の内容を略述すれば、明軍の朝鮮からの撤退、日本軍の漢城からの撤退、二人の人質王子の釈放、明使節の日本への派遣などである。これに従い、日明両軍は朝鮮からの撤退を始め、人質も解放された。

ようやく一五九六年九月に明使節団が朝鮮経由で来日し、大阪城の秀吉に謁見し、誥命と金印を与えた。<sup>(8)</sup>その後、使節団は堺で、高位の僧侶に秀吉宛ての書状を託したが、そこには秀吉が朝鮮南部に築いた城塞の完全破壊と軍の撤退を、明皇帝が要請する旨が書かれていたという。これに激怒した秀吉は二度目の朝鮮出兵を断求めて激しい争いを繰り広げるのである。

- (7) この頃士林派が四分五裂し、領袖の居住地に因んで、東人、西人、南人、北人と呼称される分派が発生し、さらに北人が大北、小北に分裂、西人も老論と少論に分裂した。これらを総称して「朋党」と云うが、各朋党は要職を求めて激しい争いを繰り広げるのである。
- (8) 秀吉が誥命と金印を授与されたことに激怒し、和議が破綻したというのは後世の創作だと著者は云う。秀吉は「唐入り」に失敗し、明の冊封に暫くは甘んじたのである。

行する。

日本軍は一五九七年に巨濟島の海戦で勝利を收め、全羅道まで駒を進めた。翌年になると明・朝鮮連合軍が大軍を編成して、日本軍の蔚山城、泗川城、順天城を攻めたが陥落させることはできなかつた。しかし、この年の秋、秀吉が伏見城で亡くなると日本軍は撤退を始め、戰鬪は終了し、その後徳川政権の下で、終戦処理がなされた。この戦役は朝鮮民衆に甚大な被害をもたらした。明軍も日本軍も行く先々で、放火、掠奪、強姦、さらに住民拉致などの蛮行を繰り返えしたのである。

ところで、逃避行を重ね民心を失つた宣祖が一六〇八年に病没すると、世子の光海君クアンヘジンが第一五代国王に即位した。かれは、大同法を制定して農民の税負担を軽減し、昌徳宮など王宮の再建を果たすなど、壬辰倭乱によつて荒廃した朝鮮の復興に尽力したが、明から正当な世子としても、国王としても認知されなかつた。それはかれが繼妃金氏の庶子で、且つ次男だつたためである。光海君が即位したとき、宣祖には嫡男の王子、光海君の異母弟となる四歳の永昌大君ヨンチャングがいた。この存在が光海君の地位を不安定にし、党派鬭争も絡んで凄惨な肅清を惹起することになる。

光海君と大北派は、先ず同腹の兄臨海君を配流とし、次に嫡男の永昌大君を江華島に配流のうえ殺害し、その外叔父の金悌男キンヂエナムも賜死させた。さらに金悌男の娘で、永昌大君の生母の仁穆王后ニンモクフ왕후を慶運宮に幽閉した。光海君と大北派はこうして政敵を排除したのだが、このことが反動を招き、終に一六二三年に「仁祖反正」インジョ・バンジョンが起きた。西人派が綾昌君スヤンゴン<sup>(9)</sup>を担いでクーデタを起こし、光海君を配流とし、李爾瞻イライチヨムら大北派を処刑・排除したのである。かくて綾昌君が第一六代仁祖インジョに即位する。

西人によるクーデタの名分は、光海君が「事大崇明」を破り、後金と通じたことだった。事実、かれは北部辺境におけるヌルハチの女真族の抬頭を見て、華夷秩序の動搖を感じていた。そこでかれは国書を送り後金と同盟関係を結んだ。つまり明との冊封関係を維持しつつ、中立的な途を選択し、朝鮮が再び戦火を蒙ることのないよう画策したのである。<sup>(10)</sup>

さて、ヌルハチは一六二六年に明の寧遠城を攻めたが、明の知将袁崇煥の反撃にあい敗退し、その年発作を起こして亡くなつた。その衣鉢を継いだホンタイジは、戦略を変更し朝鮮の平定を目指した。翌年三万の軍勢を率いて鴨緑江を渡り、平壤を陥れた。江華島に避難していた仁祖は、かれの進軍を止めるために後金と兄弟国の盟約を結び、人質を差し出すことに同意した。（丁卯胡乱）

その後ホンタイジはモンゴルを平定し、自らをモンゴル帝国の大汗の後継者になぞらえ、一六三六年には國号を「大清国」と改めた。ホンタイジは、仁祖に自分を皇帝として推戴せよと迫り、仁祖がこれを拒むと清軍・モンゴル軍・漢軍併せて一〇万の大軍を率いて進軍し、義州を経て平壤に迫つた。仁祖は江華島に逃げこ

(9) 綾昌君は、光海君の異母兄弟、定遠君の子どもである。

(10) 朝鮮の史家たちは光海君を燕山君と並ぶ「暴君」と記録しているというが、それは「仁祖反正」を正当化する事大主義者の主張だとみられる。（朴永圭著／神田聰・尹淑姫訳『朝鮮王朝実録』二七八頁）ところが、近年のTVドラマ『華政』では、光海君を、明や後金から朝鮮を守り、明から独立を果たそうとした国王として肯定的に描いている。

むこともできず、南漢山城に籠城した。飢えと寒さで絶体絶命となり、翌一六三七年に降伏した（「丙子胡乱」）。

降伏文書には、明との絶縁、人質や金銀の大清国への提供などが書かれていた。さらに屈辱的なことが行われた。漢江の渡船場の三田渡<sup>サムジヨンド</sup>で、仁祖がホンタイジの前で三跪九叩頭<sup>サンキキウコウトウ</sup>の札を強要されたのである。これは朝鮮が大清国の「属国」になることを意味した。さらに仁祖は、ホンタイジの「功德」と自らの「罪」を刻した巨大な石碑建立を強いたのである。これが「清太祖功德碑」である。

宣祖も仁祖も、國際情勢の変化を読めなかつたことが壬辰倭乱を招き、大清国への属国化を招來したのである。ひとり光海君のみが国防の備えをし、二重外交を模索したのだが、それを咎められて失脚したのみならず、未だに廟号すら与えられないのは、誠に朝鮮史の悲劇ではなかろうか。

## 5 果てしなき政争—朋党政治と勢道政治

一六四九年の仁祖逝去から一七一四年の英祖の即位まで、王位は四度継承された。すなわち、孝宗<sup>ヒョジョン</sup>（位一六四九～一六五九）、顯宗<sup>ヒョンジョン</sup>（位一六五九～一六七四）、肅宗<sup>スコチヨン</sup>（位一六七四～一七一〇）、景宗<sup>キヨンジョン</sup>（位一七一〇～一七一四）である。著者によれば、この期間は朋党政治の全盛期だった。傍から見ればほど重要とも思えぬ事柄で、四つの党派が相争つた。

孝宗の繼母、莊烈王后的服喪期間をめぐって西人と南人が争い、南人が勝利する。次に、「帷帳濫用事件」で南人が追い落とされ、西人が復権するが、南人の処罰をめぐって、西人は老論と少論に分裂する。さらに肅宗の二人の側室、張氏と崔氏の遭遇をめぐって老論と少論が争い、一旦は少論が勝利するが、一七〇一年に起こつ

た「巫蠱の獄」<sup>(11)</sup>をきっかけに老論が巻き返し、少論を排除する。景宗の治世下では、崔氏との子、李昞を世弟とし、これに代理聽政を行わせる件で、老論と少論が激しく対立する、といった具合である。勝利を収めた少論は、老論の重鎮らの配流を進言した。さらに翌年には、老論が景宗の暗殺を企てているとの告発を受けて、景宗は、金昌集など老論の領袖と支持者一七〇名を、死刑・杖刑・配流などに処した。この事件は「辛壬獄事」と呼ばれている。

景宗が亡くなると、その後を襲つたのは、かれの異母弟・李昞、すなわち延祐君で、第二一代国王に即位する。これが英祖（位一七二四～一七七六）である。英祖は、報復が報復をよぶ朋党政治の弊害を身をもつて体験したから、各党派から公平に人材を登用する政治を実践した。これが「蕩平策」と云われる政治手法である。

老論の重鎮で稳健派の洪致中を右議政に、少論の李光佐を領議政に、趙泰億を左議政に起用して、党派のバランスを保つたのである。蕩平策は党派の復讐心を和らげる効果があった。一七二八年には南人急進派の李麟佐が、忠清道で叛乱をおこしたが、不満分子を糾合できず、あつけなく官軍に鎮圧された。

さらに英祖は党争を抑える制度改革に着手した。「吏曹郎官」が保持していた言論三司（司憲府、司諫院、弘文館）の人事権を、吏曹判書（長官）に移したのである。その結果、判書の任命権をもつ宰相と国王の権限が強化され、逆に吏曹郎官とその背後にいる地方儒生の政治参与が狭まることになつた。

(11) 「巫蠱の獄」とは、張氏が居所のそばに神堂を設けて、仁顯王后を呪う儀式をおこなつていたことが判明し、激怒した肅宗が死を命じた事件である。

ところで、英祖は子どもに恵まれず、ようやく四〇歳の頃、繼妃映嬪李氏との間に王子が生まれた。この王子思悼世子<sup>サドセジヤ</sup>は乳母に育てられ、両親とは疎遠であるだけでなく、父親の英祖が景宗毒殺に関与しているとの讒言<sup>ザグゲン</sup>を宮女から吹き込まれていたため、父に不信感を抱いていた。若くして代理聽政を任せられたかれは、英祖と意見が合わず、次第に躁鬱状態になり、遊蕩に耽るようになった。

ある時、ある者が思悼世子の風紀紊乱を記した書状を英祖に渡したことがきっかけで、英祖は王子を抹殺することを決め、刀を渡して自決を促した。しかし臣下がこれを阻止すると、かれを米櫃に入れるように命じた。これが有名な米櫃事件であり、世子は八日後に飢えと渴きで死んだ。この時これを目撃していたのが、思悼世子の子、英祖の孫である李祿<sup>イサン</sup>であり、一七七六年に英祖が逝去すると第二代国王正祖<sup>チヨンシヨ</sup>となる。

正祖は王権を支える人材育成のために、奎章閣<sup>クヤク閣</sup>を創設し、名門の庶子に勉学の機会を与えた。朝鮮では庶子は両班の子であっても科挙受験の資格がなかったのである。同じ趣旨で、「抄啓<sup>チヨゲムンシン</sup>文臣」制度を作った。それは三七歳以下の若手官吏を奎章閣で再教育し、四〇歳で職務復帰させるというものだった。正祖の王権強化に貢献した丁若鏞<sup>チヨヤギヨン</sup>などもその一人である。正祖も英祖に倣つて蕩平策を採つたが、英祖のそれと異なり、自分の意に沿う者を重用したので（峻論蕩平）、朋党政治の悪弊は緩和されたが、反面、多様な意見は政策に反映されにくくなつた。

正祖の治世は文化政治と云われるが、これを搖るがしたのはカトリック信仰の拡がりだつた。朝鮮では「天主教」と呼称されるカトリックは、一七世紀以降中国経由で入つてきた。当初はその技術や学問が注目されたが、やがてその教義に関心がもたれた。一七八四年に北京を訪れた李承薰<sup>イシンフン</sup>は、そこで朝鮮人としては初めてダ

ラモン神父から洗礼を受け、帰国に際して多くの教理書を持ち帰った。以後、かれの周囲で天主教に入信する者が相次ぎ、かれの妻の兄弟たち、丁若鏞や丁若鍾も入信した。

こうしたなか丁若鏞の従弟、パウロの洗礼名をもつ尹持忠が、祖先の位牌を公共の場で焼却する事件が起きた（珍山事件）。儒教の「孝」の徳目を否定したとして、かれは逮捕され死刑となつた。その後、天主教徒らは中国から聖職者を招聘する運動をすすめ、一七九四年に中国人神父・周文謨が密かに朝鮮に入った。しかしこれが郡守の知るところとなり隠れ家が襲撃され、周文謨は事前に避難したが、朝鮮人の信者らは逮捕され拷問の末撲殺された。

この事件後、李承薰や丁若鏞は責任を追及され、斬首や配流となつた。とくに次期国政を担うと目されていた丁若鏞を失つたことは、正祖には痛手だった。正祖亡き後、天主教徒への迫害はいっそう熾烈になり、「斥邪」の名の下に信者探しを行われた。一度は逃れた周文謨も自ら出頭し、むごい「梶首の刑」に処された。この大弾圧を「辛酉迫害（シニユバケ）」と呼ぶ。この迫害で天主教に入信した南人の多くが排除され、また王族の恩彦君（正祖の異母弟）の妻が周文謨から洗礼を受けていたとして、恩彦君も連座して賜死となつた。

一八〇〇年に正祖が持病で亡くなると、その次男の純祖が第一三代国王に即位した。英祖の繼妃、大王大妃の貞純王后が、十歳の幼君を補弼して、垂簾聽政を四年間おこなつた。この時この体制を支えたのは、慶州金氏だつたが、純祖が親政を始めると、王妃選びが日程に上る。このとき金祖淳が計略をもつて自分の娘を王妃

(12) 「奎章閣」は歴代国王の詩文や書画を保管する王立図書館であった。

に据えることに成功した。これが純元王后<sup>スヌオンンフン</sup>である。一八〇四年に貞純王后が亡くなると、國舅<sup>コッキウ</sup>となつた金祖淳は、金觀柱など慶州金氏を朝廷から追放した。これ以後凡そ六〇年間、安東金氏一族が朝廷の要職を占め、政治を壟斷する。この政治を「勢道政治」<sup>(13)</sup>と呼ぶ。

勢道政治は專横と収賄など政治腐敗を招き、これに旱魃など自然災害が重なり、民の疲弊と不満がその度合いを増した。一八一年に朝鮮は大凶作となり、これを好機と捕えた洪景來<sup>ホンギヨネ</sup>が、平安道で叛乱を起こした。かれは民間に流布した『鄭鑑錄』<sup>(14)</sup>信仰に依拠して、李氏王朝の打倒を唱える檄を飛ばし定州城に立て籠つたが、数で優る官軍に敗れた。だが、この叛乱は李氏王朝を全否定する契機となり、以後民乱が頻出するようになる。

純祖は安東金氏の專横を牽制するために、豊壤趙氏の一門を重用したり、光明世子<sup>ヒヨミヨンセシヤ</sup>に代理聽政させたりした。

しかし、光明世子が早世し、その数年後に純祖も他界すると、安東金氏がふたたび天下を取る。純祖の後継国王は、純祖の世孫の李奐<sup>イファン</sup>で、これが第二四代国王憲宗<sup>ホンジョン</sup>（位一八三四－一八四九）である。安東金氏の金道根<sup>キンユグン</sup>は一八三七年に一族の娘を憲宗妃に据えて政権を牛耳る。ところが金道根が脳卒中で倒れると今度は、豊壤趙氏が実権を握る。親政を始めた憲宗は、趙寅永<sup>チヨイニヨン</sup>を領議政に任命し、安東金氏を牽制したのである。しきしそれも長くは続かず、一八四六年に趙寅永が亡くなると、再び安東金氏が政権を握るようになる。このように、外戚が代わるがわる政治の実権を掌握する勢道政治が、一九世紀後半まで続き、次第に王権は凋落していくのである。

この当時、朝鮮の内憂は天主教の広がりであり、外患は「異様船」の出没だった。天主教の迫害は先述したように、正祖の時代に始まつたが、豊壤趙氏が実権を掌握した一九世紀半ば以降ふたたび激しさを増す。一八三八年

年趙寅永は「斥邪綸音」を全国に公布し、イエスの教えは禍なり、「男女混処」は人倫に悖ると説き、天主教徒の弾圧を合法化した。学者で天主教徒の丁夏祥（丁若鏞の甥）と、フランス人宣教師三名を含む五四名が逮捕され、死罪となつたほか、六〇余名の天主教徒が絞首刑や獄死となつた。これを「己亥迫害」という。

外患は「異様船」の出没だった。一九世紀半ば以降、欧米列強がアジア諸国に開国通商を求めて侵攻するようになつたのである。朝鮮には、まずイギリス船が一八四五年に、濟州島と全羅道沿岸を測量し開国を求めた。翌年にはフランスの軍艦が来航し、「己亥迫害」に遭つたフランス人宣教師の殺害を難詰する書簡を憲宗に送り、その回答を求めた。

憲宗が一八四九年に二三歳の若さで病死すると、恩彦君の孫、李元範（イウォンボン）が王位を継承し、第二五代哲祖（チヨルチヨン）位（一八四九—一八六三）として即位した。だが、かれは江華島に流刑になつていたので、帝王学を学んでいなかつた。そこで一九歳なのに純元王后が垂簾聽政をおこない、さらに一族の娘を王妃につかせた安東金氏の勢道政治は続いた。

勢道政治の政治腐敗は民衆の生活を圧迫し、王朝の衰退を加速化した。国家財政を悪化させたのは「三政紊

(13) 勢道政治といふのは、国王の寵臣や外戚が王権を笠に、あるいは無視して独裁権力を行使した政治形態を云う。

その嚆矢は正祖治世の洪國榮（ホングイヨン）に求めることができるが、一般にはこの純祖に始まる安東金氏の権勢を指す。なお、安東といふのは、慶尚道北部の郡を指す。

(14) 「鄭鑑錄」（チヨンガクノク）といふのは民間信仰で、乱世には鄭氏の真人が現れて李氏王朝に代わる王朝を開くという預言書である。

乱』である。三政とは、田政（土地税）、軍政、それと還政（還穀）をいうが、なかでも還穀は農民にとつて命綱であった。郡守などはこれを悪用し、高い手数料を取るようになつたのである。民衆は彼らを「貪民汚吏」と呼んだ。民衆虐政はやがて一八六二年、全土に拡がる大規模な民乱を惹き起こした。その発火点となつたのが慶尚南道・晋州の農民蜂起である。<sup>(16)</sup> この地に赴任した節度使・白渠莘<sup>(ベクナサン)</sup>が、赴任一年の間に一万五千石のコメを不法に収奪し、還穀でも不当な利益を上げたのである。

没落両班に率いられた農民は棍棒などをもつて蹶起し、不正官吏を捕らえて殺害し、富豪の家を襲撃して財物を掠奪した。この蜂起は三ヵ月後に鎮圧され首謀者が梶首されたが、農民蜂起はここから燎原の火の如く全羅道や忠清道にも広がつた。農民の怒りがいかに大きかつたかが窺える。

社会不安のなか新興宗教とも云うべき「東学」が現れる。東学は、慶州出身の崔濟愚<sup>(チエシユウ)</sup>が、儒教、仏教、道教を土台に民間信仰などを加味して一八六〇年に創つたもので、終末論と平等思想を特徴とした。これが虐政に苦しむ農民に浸透してゆき、後に東学（甲午）農民蜂起に繋がるのである。

## 6 國際關係に翻弄される朝鮮

一八六三年に哲宗が三三歳で逝去すると、神貞王后<sup>(シンジョン왕후)</sup>は王族の傍系、李是応<sup>(イハウン)</sup>と謀つて、李是応の子息命福<sup>(ミョンボク)</sup>を王位に就けることに成功した。これが李氏朝鮮最後の第二六代国王、高宗<sup>(고종)</sup>である（位一八六三～一九〇七）。幼い国王に代わつて、神貞王后が垂簾聽政をし、李是応は興宣大院君<sup>(フン선대원군)</sup>として国政運営を牛耳つた。興宣大院君は、安東金氏一族の分断を図り、世道政治に終止符を打つことはできたが、内憂外患にはうまく対処できなかつた。

大院君は「衛正斥邪」<sup>(17)</sup>を掲げてまず東学を弾圧し、指導者の崔濟愚を斬首に処した。さらに一八六六年には天主教徒を捕らえ拷問を加えて殺害した（「丙寅迫害」）。この中にフランス人宣教師九名も含まれていたことが外患を招くことになった。地方にてこの難を逃れたフランス人神父が、北京駐在の代理公使ベルネに事件を報せると、ベルネは七隻の軍艦を送つて僅か一日で江華府を占領した。だがフランス軍は朝鮮軍の反撃に遭つて、この時は撤退した（「丙寅洋擾」）。その後、天主教徒への弾圧はいっそう激しくなった。

一八六六年、アメリカの商船が交易を求めて大同江を遡航したが、朝鮮の軍民により商船は放火され、乗組員は殺害された。アメリカは損害賠償と通商条約の締結を求めてきたが、朝鮮側はこれを無視し続けたので、ついに一八七一年にはアメリカはアジア艦隊の軍艦五隻、一二三〇名の兵力を仁川に派遣し、江華島を占領した。それでも朝鮮は降伏しなかつたのだが、アメリカ海兵隊はそれ以上の作戦展開は無理と判断し撤退した。（「辛未洋擾」）著者は短期的に見れば、朝鮮は「洋夷」を擊退し成功したように見えるが、巨視的には開国のチャンスを逸したと云う。このことが朝鮮の植民地化の遠因になつたと考えられる。

ところで、明治維新を経た日本は、初めは対馬藩を介して朝鮮との外交関係の樹立を画策したが、一八七一年以降は直接日本政府が乗り出し、釜山の「倭館」を「大日本公館」と改称した。だが朝鮮側は日本の外交官

(15) 還政（還穀）というのは、農民に再生産のための穀物や種子を低利で貸し出す制度である。

(16) 著者はこの農民蜂起の呼称を記していないが、「韓國歴史地図」では「壬戌農民蜂起」と記されている。（一四〇頁）

(17) 「衛正斥邪」とは、正学としての朱子学を「衛り」。邪学を排斥するという意味である。

が軍艦と汽船で来航したことを咎め、交渉に応じなかつた。その後、大院君が失脚し、また台湾への日本出兵の報を聞いて朝鮮側はいくぶん軟化した。ところが予備交渉は進まなかつた。というのは、使節団のレセプション（宴享）で、日本側が西洋式の大礼服を着用することに朝鮮側が難色を示したからだつた。

その後、排外主義を唱える大院君が政権復帰するかもしれないとの情報を得た日本は、その前に片をつけようとして武力をもつて開港を迫つた。すなわち一八七五年、日本は軍艦・雲揚号を派遣し、江華島の草芝鎮を攻撃し、対岸の永宗島を占領した。これが江華島事件だが、これに驚いた宗主国・清の李鴻章が介入し、翌一八七六年日朝修好条規が締結された。西洋の技術や軍装備を導入し自強を図ろうとする開化派、および、高宗と王妃閔氏の朝廷は開国に舵をきつたのである。一八八二年には清の李鴻章の仲介で、アメリカと米朝修好条約が締結された。だが、高宗はそこでも朝鮮は「清の属国」であることを明言していたという。<sup>[18]</sup>開化派は日本の明治維新を評価し、その経験を学ぶために六二名の「紳士遊覧団」を日本に派遣した。

ところが朝鮮の近代化は一筋縄ではゆかなかつた。清の介入が強まつたのである。そのきっかけは閔氏政権が日本の指導の下で新式の軍隊「別技軍」を創り優遇し、旧軍の兵士を冷遇するようになつたことだつた。俸給米の遅配など差別的扱いをうけた旧軍の兵士は激怒し、米を配給する役所やその責任者・閔謙縞<sup>ミンギョムホ</sup>の邸に乱入した。これを奸計と捕えた大院君は腹心たちを使って騒ぎを煽動し、叛乱を企てた。別技軍を指導した日本公使館を襲撃し、指導した堀本礼造らを殺害し、昌徳宮にも乱入した。身の危険を感じた高宗は、大院君に兵を引くよう懇請し、さらに政務も委ねると約束した。(「壬午軍乱」)

一方宗主国の清は、日本の出兵を予想して素早く反応し、朝鮮に兵を送り、大院君を難詰したうえ清に連行

した。そして貿易協定を結び、漢城に清軍を駐留させ、清にならった軍政や行政機構を押し付けた。今や朝鮮は完全に清の属国となつた。これを不満とする金玉均ら親日開化派は、新任の竹添進一郎弁理公使と謀つて、一八八四年にクーデタを起こすが、袁世凱ひきいる清軍の反撃にあり失敗した（甲申政変）。この政変の事後処理は、翌年伊藤博文が清の李鴻章と交渉して天津条約を締結し、両国が朝鮮から撤退すること、両国あるいは一国が派兵を要する場合は相互に連絡することを約して落着した。

清の抑圧が強まると、これを牽制すべく高宗はロシアに接近した。清の外交顧問として赴任していたドイツ人メレンドルフを介して、ロシアの軍事教官招聘を試みたり、ロシアの代理公使ウエーバーが漢城に着任すると、有事の際にはロシアの「保護」を求める秘密協定を結ぼうと企てた。いずれも事が露見して水泡に帰したのだが、その都度清は朝鮮に不信感を募らせた。ところで、甲申政変で逮捕を逃れ日本に亡命した金玉均ら開化派高官は、誠に波瀾に富んだ運命を辿るのだが、紙幅の都合で割愛する。

一八八〇年代以降朝鮮では経済状況が悪化し、売官も横行して民衆は苦境に喘いだ。このような状況下で東学は民衆のなかに支持を広げ、処刑された崔済愚の冤罪を晴らし、かつ貪官汚吏の肅清を求める運動を展開した。一八九四年全琫準<sup>チヨンボンスン</sup>に率いられた農民は、全羅道・古阜<sup>コブ</sup>郡守の悪政に立ち上がり、糧穀を奪い返した。中

(18) その後朝鮮はイギリスやドイツとも修好通商条約を締結する。著者はそれらの内容を紹介していないが、どの条約でも、関税自主権の明記がなく、また外国人租界での犯罪は治外法権とする内容で、不平等条約だった。（韓國歴史地図）、一四六頁）

央政府が民乱参加者を逮捕し殺害したため、運動は再燃して全州一帯に拡大し、政府軍と激しい戦いの末、農民軍がこれを破つた。(東学(甲午)農民蜂起)<sup>(19)</sup>

窮地に陥つた政府は、清に乱の鎮圧を要請し、これに応えた清軍は忠清道・牙山に上陸した。だが、これは高宗の軽率な行動であり、日本軍に出兵の口実を与えることになつた。先の天津条約では、有事の際に日清のどちらかが派兵する場合は、互いに連絡することになっていたからである。日本軍は居留民保護を口実に、大鳥圭介公使と陸海軍が漢城に入り、乱の鎮圧後も居続け、高祖に内政改革を強く求めた。日和見の高宗は蟄居中の大院君を執政に呼び戻し、他方で、開化派高官に日本流の行政組織改革を断行させた。詳しくは割愛するが、略言すれば、宮中と政府を分離し、政治権力を国王から専門省庁(衙門)の長に移すことだつた。<sup>(20)</sup>

政権に復帰した大院君は、清軍と東学の力を借りて日本軍を追い出し、その後、現政権を倒し孫の李塉鎔を国王に推戴しようと裏工作をめぐらせた。しかし、計画が露見し、また日清両国との間に戦争が起こつたこともありクーデタは未遂に終わつた。李塉鎔は死刑を免れたが配流となり、大院君は蟄居処分となつた。この間、日本軍は平壌や黃海沖での戦いで清を破り、翌年には下関条約を締結した。この条約により、朝鮮は清の属国たることを止め「独立国」となつたが、現実には清に代わつて日本とロシアに従属するようになる。

日本は顧問団を送りつけ、開化派に行政、司法など官制改革を促し内政干渉を進めた。これに対し政治の実権を奪われた高宗と王妃閔氏は、ロシアを頼んで巻き返しを図り、日本が三国干渉にかかぢらつている隙をついて、親日開化派の閣僚を更迭し、親ロシア派に代えた。これに危機感を抱いた日本は不穏な計画を練る。新たに着任した三浦梧楼・全權大使は親日派官僚と謀り、再び大院君を招き出し、王妃閔氏の殺害を企てた。日

本公使館守備隊や訓練隊、日本人の「壯士」らが王宮に乱入し王妃閔氏を殺害したのである。（「<sup>イツビ</sup>乙未事変」）この事件は当然ながら大きな反撥を惹き起こした。開化派政権が断髪令を発したことでも火に油を注ぎ、全土に叛乱が起きた。

高宗は、叛乱鎮圧のため親衛隊が王宮を離れた隙をついて、ロシア公使館に駆け込み（「露館播遷」）、そこから民衆に親日内閣打倒の檄を飛ばした。かくて総理大臣・金弘集キムホンジは群衆に撲殺され、閣僚らは国外逃亡し、代わって親ロシア政権が誕生した。その後、高宗は王宮に戻り、国号を「大韓」に改め「皇帝」に即位し、統帥権や立法権など全権を掌握した。「甲午改革」は頓挫したのである。

朝鮮で劣勢に立たされた日本だが、山県有朋がロシアと協定を結び、辛うじて足場を保った。だが、一九〇〇年の義和團事件に、ロシアが十万の軍隊を派遣し、そのまま満洲に駐留させたことがきっかけになり日露両軍が正面衝突した。日本は一九〇四年早々に大韓帝国と日韓議定書を締結し、領土保全や皇室の安寧を約し、代わりに軍事上の便宜を獲得したことも幸いして、旅順、奉天での戦い、日本海海戦に勝利し、ポーツマス条約により大韓帝国を「指導・保護・監理」する権利を獲得した。こうして韓国は日本の保護国となり、第二次日韓協約締結によって、外交の自主権を喪失した。

(19) この辺りの状況は、韓国映画『緑豆の花』に見事に描かれている。

(20) 省庁は、内務、外務など八衙門が新設された。行政機構の改革の他に、科挙の廃止、身分制度の廃止、税の金納化などさまざま近代化が盛り込まれていた。これは「甲午改革」と呼ばれる。

初代統監の伊藤博文は外交だけでなく内政にも干渉してゆくのだが、韓国併合については経済負担が大きいので消極的だったという。かれの狙いは宮中の近代化であった。というのは、大韓帝国はいまや破綻した「家産国家」であり、皇帝のもつ國家財政の権利を放棄させる必要があったからである。親日派の総理大臣・李完用は近代化のために障碍となる高宗に譲位を迫った、これが達成されると、一九〇七年には第三次日韓協約が結ばれ、日本による近代国家への転換はいっそう進む。裁判長や検事に日本人が登用され、軍事費削減のため軍隊が解散され、傭兵制が廃止され徴兵制が施行されたのである。

譲位した高宗の後繼皇帝は純宗だが、伊藤はかれの異母弟・李垠(イウン)に期待を寄せ、かれを日本で教育し次の皇帝になつた暁には、親日的な立憲主義体制をとらせ、日本の利益を確保することを目論んでいた。伊藤は宮中改革に目途がつくと、一九〇九年に統監を辞任する。ところが、同年十月伊藤が安重根によってハルピンで暗殺されると情勢は一変し、山県や寺内らの陸軍閥が強硬路線を主張し、韓国併合が推し進められるのである。

日本政府は併合準備委員会を設けて、併合後の国称や大韓帝国皇室の処遇などを検討し、その案をもとに第三代統監の寺内正毅が、韓国の李完用らと密かに交渉した。李完用らがとくに拘つたのは、国称と皇室の処遇だつたが、国称は「朝鮮」、皇帝は「李王」とし、皇室には破格の厚遇を与えることで合意し<sup>(21)</sup>、一九一〇年八月韓国併合が実現した。

さてこの韓国併合を我々はどう捉えたらよいのか。著者は、これを推進した李完用ら親日派は、李氏朝鮮末期の苛斂誅求と社会の荒廃から民を救うために苦惱し、他国に統治を委ねる不名誉な作業を担つた、にもかかわらず現代の韓国社会では売国奴として蛇蝎の如く嫌われている、と云う。他方で、韓国併合は日本にとつて

も重い経済的負担となつたと云う。併合直後に日本政府は臨時恩賜公債三千万円を発行し、うち一七四〇万円を授産・教育・備荒の資金として十三道に分配したし、翌年以降も毎年一二〇〇～一三〇〇万円の運営費補填をした、さらに大韓帝国の莫大な債務も帳消しにしたと云う。つまり伊藤博文が懸念したように、韓国併合は経済的にみれば引き合わなかつた、とも述べる。

確かに当時の朝鮮の政治状況を見れば、高宗と閔氏王妃の朝廷も、政府も統治能力を欠き、国民の信頼を喪失し、右往左往し事大主義に陥つていた。すなわち、ある時は清に、またある時はロシアや日本に取り入り政権を維持しようとした。清もロシアも日本に敗れると、その揚句日本に従属を深めることになった。一進会のような親日団体の活動が一定の影響力をもち始めたことも頷ける。それでも、多くの韓国民にとつて、日本の韓国併合は承服しがたいことだつたに違ひない。そこで独立運動の機運が高まる。高宗の葬儀の際に京城（旧漢城）で起きた、一九一九年三・一運動はその最初の発現だつた。

しかしこの辺りの叙述は簡単で、著者は三・一運動も余り評価していない印象をうける。この運動は韓国では神聖視されているが、デモ参加者には日當で集められた労働者も多かつたと述べる（二二五頁）。だが、『韓国歴史地図』によれば、この運動は全土に展開したことが示されている。一万人以上のデモ参加者を記録した都市は、北は義州から南は釜山まで四一都市を数えるし、京畿道では六六万人ものデモ参加者があつたことが分か

(21) 皇室の歳費は一五〇万円とされたが、当時の日本の総理大臣の年俸一万三千円、十一の宮家の皇族歳費が計八〇万円だつたことからみても如何に巨額であつたかが窺える。

る。これに対し、日本は警察と軍隊を動員してデモ参加者を逮捕し拷問を加えたと記す。(一四一頁)

これに関連して私が疑問に思うのは、本書には韓国併合後の日本の統治について殆んど記述がないことである。朝鮮総督府は、どんな政策を採ったのか、「皇民化政策」の実態はどうだったのか、強制連行はなかったのか、などがネグレクトされている。この欠如は誠に残念である。というのは、今なお払拭できない韓国民の反日感情の根源は、この辺りに存すると思われるからだ。日本統治は、韓国民の誇りを傷つけ、耐え難い屈辱を与えたのではないかろうか。

本書に戻ると、独立運動家らは海外に亡命してそこに臨時政府を立ち上げて活動した。なかでも上海にできた「大韓民国臨時政府」は最重要の拠点だった。その首班に任命されたのが李承晩(イ・ソンマン)である。本書ではその経歴が詳述されているが紙幅の都合で割愛する。李承晩は外交努力によつて独立を達成しようと考えていたが、敗北主義と非難され地位を失しアメリカに渡つた。その後釜となつたのが金九(キム・ウク)で、武装闘争で独立を達成しようとして日本の要人を襲撃した。

他方、抗日独立運動の主役は共産主義者(コミニスト)たちだったという。彼らは閔東軍や当局の弾圧で本国での活動が難しくなると、中国東北部で活動せざるを得なくなる。活動していた幾つかの分派は、一九二九年にコミニンテルンが決定した「一国一党の原則」に従つて、中国共産党に所属して活動を続けた。この抗日パルチザンを率いたひとりが金日成(キン・イルソン)だつた。

第二次世界大戦末期、米英ソはヤルタで会談し、極東に関するてはソ連の対日参戦の見返りに、満洲の権益と南樺太・千島列島の割譲で合意した。だがローズベルト大統領が急逝すると事情が一変した。すなわち後継のトルーマン大統領は、ソ連の対日参戦前に日本の降伏を果たそうと、できたばかりの原子爆弾を広島・長崎に投下したのである。ソ連の朝鮮占領を怖れたアメリカは、半島を二等分する北緯三八度線を設定したが、意外にもソ連はこれに異議を唱えなかつた。こうして朝鮮半島は南北に分断され、アメリカは半島南部を占領し、一九四五年九月にソウルに進駐し、日本の降伏文書に調印し、軍政庁を設けて統制権を確立した。

一方、終戦とともに朝鮮内部でも新政府樹立の動きが起つた。建国準備委員会が結成され、やがてコミュニストの朴憲永パクコニヨンが主導権を握つて「朝鮮人民共和国」の樹立を宣言した。他方、右派グループは宗鎮禹を党首とする韓国民主党を立ち上げ、これと対峙した。そして米軍政庁と親密な関係を築き、その要職を占めて「朝鮮人民共和国」と敵対してゆく。

アメリカは半島全部を信託統治する構想をもつていたが、韓国民主党は民衆の支持を得ていなかつたので、マッカーサーやホッジは、李承晩を「民族の英雄」として担ぎ出し、左右両派のまとめ役を任せることにした。

一九四五年十月にアメリカから帰国した李承晩は、さつそく「独立促進中央協議会」（独促）を結成し、ここに民主党と共産党との統一戦線が誕生するかに見えたが、それは一瞬の幻影であつた。李承晩は反ソ・反共主義者であり、朴憲永とすぐに反目した。さらに同じころ上海の臨時政府の要人たちが帰国した。その統領金九は民族の「総團結」のために左右両派の団結を訴えたが、李承晩はラジオで反ソ反共の政見放送を流して、その考えを一蹴した。

他方、北朝鮮でも民族独立の動きが起こっていた。『朝鮮日報』社長の曹晩植や、コミュニストの玄俊赫らがそれぞれ建国の準備組織をつくった。進駐したソ連は平壤に司令部を設け、右記の二人に統一戦線の結成を働きかけた。スターリンは敢えてソ連型の議会や秩序を導入しないという配慮をした。ただ統一戦線の中核になる共産党が北には不在だったので、ソウルの共産党中央の分局というかたちで平壤にも党組織が創られ、やがてそのトップに金日成が「民族の英雄」として就くのであるが、著者によれば、かれが抗日パルチザンとして輝かしい実績を挙げたというのは作り話らしい。<sup>(22)</sup>

それはともかく米英ソの外相らは、一九四五年一二月モスクワで会議を開き、朝鮮を五年間の信託統治下に置くことで合意したが（モスクワ協定）、朝鮮民衆の多くは即時独立を望み、また臨時政府の金九らも信託統治反対の国民運動を開いた。他方、民主党の宗鎮禹らは信託統治方式を受け容れようとした。李承晩は信託統治に反対しながらも、米軍政府の正統性を擁護するという巧妙な戦略をとつた。

ところが翌年になると潮目が変わり、朝鮮共産党は民主主義のためには信託統治が最善だと態度を変えたし、北朝鮮でもコミュニストらはモスクワ協定に賛成の態度を表明し、さらにソ連軍政当局の意向に沿うかたちで、北朝鮮臨時人民委員会が結成され、その頭に金日成が就くのである。

この頃から米ソの対立は顕わになってきた。ソ連は臨時民主政府の協議に参加できるのは、モスクワ協定を認め、反ソ的ではない「民主的」な団体・政党に限られるとした。アメリカはもちろんこれには強く反対したので、第一次米ソ共同委員会は一九四六年五月に決裂し無期休会となつた。

この決裂は重大な意味をもつていたようだ。米軍政府はコミュニストの弾圧にのりだした。朝鮮共産党が、

日本の統治時代に朝鮮銀行券を発行していた印刷所に残る原版を利用して、一二〇〇万円の偽造紙幣を発行したとの嫌疑をうけて幹部が逮捕された。党首の朴憲永は北朝鮮に逃れたが、以後共産党の活動は困難になった。この共産党弾圧は全土に反米闘争を惹き起こした。鉄道労組はじめ、重要産業労組もストライキを構えソウルは麻痺状態に陥った。その一週間後、大邱駅前に労働者や学生ら一千五百名が集結しデモを行い、これを弾圧する軍政警察と衝突した。デモはここから慶尚道や全羅道一帯に飛び火した。<sup>23)</sup>民衆蜂起は共産党弾圧に抗議するだけではなく、米軍政庁の統治政策の不備と失敗への抗議でもあったようだ。

米軍政庁は李承晩の南朝鮮単独政府構想には難色を示し、中道勢力による臨時政府の樹立が望ましいと考えていたが、朝鮮共産党や韓国民主党は、これに冷淡な態度を示して実を結ぶことはなかつた。他方、北朝鮮では、北が主導するかたちで統一を実現すべし、との考えが支配的になつた。これはソ連のシナリオに沿うものだけではなく、米軍政庁の統治政策の不備と失敗への抗議でもあったようだ。

(22) 金日成はソ連軍の第八八特別狙撃旅団に属していたが、その出動命令が出るのは一九四五年九月二日であり、北朝鮮の元山港に辿り着くのは同一九日、平壤に到着したのは一二二日だった。かれが朝鮮革命軍を率いて凱旋したといふのは政治神話だという。

(23) 著者は詳述していないが、食料政策の失敗が根底にあつた。米軍政庁は日本統治時代の米配給制を止めて、穀物自由化政策をとつたが、その結果、米消費の急増、商人による米の買い占めと売り惜しみ、そして米価高騰を招いた。これをみた軍政庁は米配給制を復活し、配給に必要な米を強制的に、しかも極めて安価に徴収した。強制的な徴収は米だけでなく麦にも適用されたという。半島南部で農地解放が断行されなかつたことも、小作農など農民の不満を醸成したようである。(『韓国歴史地図』「アメリカ軍政と民衆の生活」一八四一~一八五頁)。

で、そのために北朝鮮共産党と延安派の朝鮮新民党が合同して、朝鮮労働党が結成され、その事実上の指導者に金日成が就いた。

翌一九四七年になると情勢が一変し、ヨーロッパの共産化を恐れたトルーマン大統領が、共産主義封じ込め政策を宣言した。いわゆる「トルーマン・ドクトリン」であるが、それでも朝鮮では、米軍政庁が米ソ共同委員会の開催を模索していた。一九四七年五月にソウルで開催された第二次米ソ共同委員会は、前回と同じ理由で、すなわち臨時政府樹立の協議に参加しうる団体や政党要件で対立し、結局なんの成果もなく決裂した。

この後、朝鮮問題は国連の場に移された。同年十一月開催の国連総会では、南北朝鮮での総選挙実施や国連臨時朝鮮委員会の設置が決まった。この間、李承晩は南朝鮮での単独政府を声高に主張していたのだが、米軍政庁は本国政府が対ソ強硬論に転じたこともあり、次第に李承晩を認めるようになってゆく。

国連臨時朝鮮委員会の代表団は一九四八年一月にソウルに着くと、政治指導者の意見聴取にかかりたが、コミニストらは地下に潜っていたので、聴き取りは金九や金奎植などごく一部に限られた。しかもソ連が北への立ち入りを拒否していたので、金日成らには会えなかつた。委員団は帰国すると自分たちで朝鮮問題を解決することは無理だと判断し、幾つかの案を提示するに留まつたのだが、その第一案が南での単独選挙であつた。アメリカはこれを支持したが、ソ連はボイコットした。

他方、金九や金奎植は多くの文化人に支持されて、李承晩に対抗する統一政府樹立の路線にこだわり、そのために金日成ら北のコミニストとの連繋に動いた。一九四八年四月に、平壌の牡丹峰劇場<sup>モダンボン</sup>で開かれた連席会議には一六の政党、四〇の社会団体が参加し、米ソ両軍の撤退、この会議に出席した団体・政党による臨時政

府の樹立と統一選挙の実施、そして統一政府の樹立などの共同声明を採択した。しかし、著者は、金九らの理想主義者は世界情勢を読めず、北朝鮮やソ連に利用されただけだとべもない。というのは、連席会議の開かれていた丁度その時、スターリンは別荘にモロトフら幹部を集め、南の単独選挙後に、北では北朝鮮憲法を制定して政府を樹立するというシナリオを準備していたからだといふ。

南では、一九四八年五月に国連監視の下で選挙が実施され、李承晩率いる大韓独立促成国民会や韓国民主党の議員が大勢を占めた。金九など左派陣営が選挙をボイコットしたためである。制憲議会は憲法を制定し、議員の間接選挙で李承晩を大統領に選出し、大韓民国の樹立を宣言した。

他方、北でも最高人民会議の選挙が行われ、五七二名の代議員のうち、三六〇名が南で選ばれたことになつてゐる。同年九月には憲法が制定され、朝鮮民主主義人民共和国が樹立され、その首相に金日成、副首相に朴憲永が、最高人民会議常任委員会委員長には金科奉が就いた。こうして南北それぞれに独立国家が生まれるのを見届けて、米ソ両軍は朝鮮から撤退した。

しかし、北朝鮮の金日成は南の「解放」を諦めず、対南攻撃のために軍事力の強化に努め、スターリンや毛沢東に攻撃の許可を打診していた。一九四九年には国際政治のパワーバランスが崩れ、金日成に有利な条件が生まれた。すなわちソ連が核実験に成功し、中国共産党が国民党政権を倒して中華人民共和国を樹立したのである。

アメリカは極東戦略の見直しを迫られ、一九五〇年一月アチソン国務長官は、「不後退防衛線」の構想を表明した。それはアリューシャンから日本、琉球を経てフィリピンに至る防衛線の内側が軍事攻撃を受けた際には、アメリカ軍が反撃するとの内容だった。だが、韓国と台湾はこのラインの内側に含まれていなかつたことが、戦

争の引き金になつた。

金日成はスターリンと会談し、アメリカが朝鮮有事の際にも介入しないとの判断を共有し、さらに毛沢東の支持を得て対南攻撃を決意した。一九四九年六月二五日、北朝鮮軍は三八度線を越えて南進し、開城、ソウルを占領した。驚いたアメリカは国連安保理に、これを非難し戦闘の即時停止を求め、さらに国連加盟国がこの地の平和と安全のために韓国に協力するとの決議案を上程、可決されると朝鮮に軍隊を派遣した。しかし米軍は北の進撃を止められず、逆に師団長が捕虜となつてしまつた。そこで、国連安保理は七月に韓国への武力援助と国連軍の結成を決議し、マッカーサーを総司令官に任命した。

国連軍は釜山を死守した後、仁川に上陸し北朝鮮軍を追撃してソウルを奪還した。金日成は満洲に逃亡しつつ、ソ連と中国に直接的軍事援助を求めた。毛沢東は初めは慎重だったが、北朝鮮という緩衝地帯を失うことを恐れて参戦を決意した。北朝鮮軍を指揮下に収めた中国軍は国連軍と対峙した。両者は一進一退の戦いを繰り広げ、三八度線付近で膠着状態になつた。

こうした状況下で一九五〇年七月に休戦会議がまず開城で、のちに板門店で開かれた。会議は軍事境界線と捕虜問題で対立し中断が繰り返されたが、一九五三年アメリカでアイゼンハワーが大統領の就任し、また同じ頃ソ連のスターリンが死亡すると状況が変わり、休戦協定が調印された。しかし、驚いたことに、韓国は当事者でありながら蚊帳の外におかれ、板門店での休戦協定調印式でも、その後<sup>ムンサン</sup>汝山や開城での調印式でも、韓国代表が署名することはなかつたのである。

本書の記述はここで終わつてゐる。その後も、現代韓国では南北統一をめぐつて輿論が鋭く対立し、政権が

代わるたびに融和か敵対かで揺れている。今では分断はすっかり固定化した感がある。

さて本書全体の印象だが、李氏朝鮮五〇〇年の政治史が、「政争と外患」の観点から要領よく描かれていたと思う。その上で、朝鮮王朝ではなぜかくも王族同士や重臣貴族間で、「血で血を洗う」政争が、絶え間なく繰り広げられたのだろうか、という素朴な疑問が湧く。江戸時代の徳川幕府の重臣間の権力争いもこれほど熾烈でも残忍でもないし、将軍の跡目争いも、李氏朝鮮朝廷ほど壮絶でも凄惨でもないよう思う。これは権力の在り方や大きさに由来するのかも知れない。分権的な幕藩体制と中央集権的な李氏朝鮮では、将軍と国王の権限には雲泥の差があつたに違いない。朝鮮では国王とそれを補佐する重臣たちの、民の富と労働を搾取・収奪する権限がとても大きくかったのだろう。だから両班階級はこの権益に与ろうと熾烈な政争に明け暮れたのではないか。しかし、それだけでは執拗に繰り返される復讐劇は説明できないように思う。朝鮮の「恨」の強さはこの民族に特有な体質なのだろうか。

もう一つ朝鮮史に固有な「外患」は、ある意味で地政学的に宿命的なもののように思える。北の強大な中華帝国の存在はこの国を翻弄し続けた。その従属から離脱を企てた光海君は、ついに明から正式な国王と認知されなかつたし、逆にかれを倒した仁祖は、女真族のホンタイジに三跪九叩頭という屈辱を強いられた。李朝末には、加えて日本とロシアが朝鮮に介入し、国王や重臣らは右往左往し続けた。第二次世界大戦後には、冷戦の最前線に立たされ、アメリカとソ連が介入し半島を分断した。北朝鮮が金一族とコミュニストの軍事独裁国家になろうとしている今、東西ドイツが統合したように、南北朝鮮が統一し、民主主義国家を形成する道は遙

## 『朝鮮半島の歴史—政争と外患の六百年—』

かに遠い。せめて韓国だけでも、左右両陣営が積年の怨念を越えて、政治的寛容さを取り戻すことを切望する。本書は、李氏朝鮮五〇〇余年の歴史と、その後の植民地時代から独立と分断までの韓国史を、簡にして要を得て描いた力作だと思う。その上で、現在の日韓関係を考える際に避けて通れない事柄については、主観的な叙述が気になつたし、少し勘ぐつた云い方をすれば、意識的に避けた印象がある。例えば、一九一九年の三・一独立運動の叙述では、「デモ参加者には日当で雇われた労働者が多かつた」との記述は、朝鮮の歴史家ならずとも異論が出そうだ。また、創氏改名や皇居遷拝などいわゆる「皇民化政策」も、ほとんど記述がなかつた。我々日本人は触れたくないが、朝鮮民衆には苦くて屈辱的な経験だった筈だ。未だに尾を引く「歴史問題」の在りか、つまり植民地時代に日本の朝鮮総督府が、朝鮮社会にどんな政策を実施したのかを、ネグレクトせずに描くことは、日韓の相互理解にとって必須であり、歴史家の責務ではなかろうか。

(二〇一五年二月二五日脱稿)

新城道彦著 『朝鮮半島の歴史—政争と外患の六百年—』 新潮社 二〇一三年 二九二頁 一七五〇円+税

### § 参照文献

朴永圭著／神田聰・尹淑姫訳 『朝鮮王朝実録』(改訂版) キネマ旬報社 二〇一二

韓國教員大学歴史教育科著／吉田光男監訳 『韓国歴史地図』 平凡社 二〇〇六